

正 福 寺 遺 跡

福岡県久留米市国分町字日渡所在遺跡の調査

久留米市文化財調査報告書第16集

1 9 7 7

久 留 米 市 教 育 委 員 会



序

久留米市国分町字日渡の正福寺は、9世紀の創建と伝えられる天台宗の古刹ですが、一方この付近は、久留米市内における有数の縄文時代遺物の散布地として知られ、これまでも多くの遺物が採集されています。

このたび、正福寺住職高木亮真、正福寺幼稚園々長高木亮齊両先生のご理解とご協力を得て、園舎増築予定地の緊急発掘調査を実施いたしました。本書はその報告書ですが、短時日の調査にもかかわらず、所期の成果を挙げることができましたことは、まことに喜ばしい次第であります。

施工直前のさし迫った状況の中で、文化財保護のため発掘調査を快諾され、かつ多大の便宜を与えられた両高木先生に対し、心から感謝の意を表したいと思います。また、何かとご協力戴いた正福寺幼稚園の諸先生方、先生方のご注意をよく守り、調査を円滑に進めさせて下さった園児の皆さんにも、あわせてお礼を申し上げます。

本書が貴重な記録として郷土の歴史の理解に役立ち、更には文化財保護思想の普及に貢献するところがあれば幸いです。

昭和52年 7月31日

久留米市教育委員会

教育長 安 元 忠 男

例 言

- 1 本書は、正福寺幼稚園々舎増築に伴い、昭和52年5月31日から6月4日にかけて実施した正福寺遺跡の発掘調査概要である。
- 2 発掘調査は、久留米市教育委員会が主体となり、文化庁文化担当の松村一良、櫻井康治が担当した。
- 3 本書の執筆は、Ⅰ－櫻井康治、Ⅱ－萩原裕房、Ⅲ－松村一良・富永直樹・櫻井康治・古賀壽、Ⅳ－古賀壽が分担し、掲載の図版は、櫻井、松村が撮影した。
- 4 本書の編集は、櫻井が担当し、本書の作成にあたっては、藤田美佐子氏をはじめ多くの方々の協力を得た。

本 文 目 次

I は じ め に.....	2
II 正福寺遺跡の位置と環境.....	2
III 遺 構 と 遺 物.....	4
IV 正 福 寺 の 沿 革.....	14



第1図 遺跡分布図 (1/2000)

I はじめに

昭和52年5月、国分町字日渡の正福寺幼稚園に於いて、園舎増築計画が進められている旨の連絡が市教育委員会にあった。早速幼稚園に赴いて園長先生と話し合いを行ない、国分町字日渡一帯が、縄文時代の土器片等の散布地であることを説明し、文化財保護への協力をお願いした。その結果、10日間の予定で発掘調査を実施するよう決定し、5月31日より調査を開始し、6月4日に終了した。

II 正福寺遺跡の位置と環境

正福寺遺跡は、福岡県久留米市国分町字日渡、正福寺境内に所在する。ここは、高良内町杉谷に水源を発して西北流し、筑後川に注ぐ高良川の南岸、浦山丘陵及び打越丘陵にはさまれた低台地上に位置している。この一帯の低台地は、桃太郎川・金丸川等の小河川による開析を受け、複雑な出入をみせているが、その縁辺を点綴して多くの遺跡が分布する。

正福寺遺跡もその1つで、桃太郎川の支流と金丸川によって開析された台地の北縁近くに立地し、標高では30m等高線の先端を占めるが、周囲の水田面との比高は1m足らずである。

本遺跡は、早くから久留米市内有数の縄文時代の遺物散布地「日渡遺跡」として知られており、付近には日吉神社境内・字政所・字白川といった散布地が分布し、高良山麓には、多数の押型文土器を出土した横道遺跡があり、山中でも押型文土器や石器の出土が伝えられている。

弥生時代の遺跡は、高良山西麓から筑後川縁辺の低台地上に集中的に分布している。御井町の旗崎・二本木遺跡、矢取隈遺跡、南薫本村遺跡等はその主なものであるが、日渡付近にも遺物の散布が認められる。

古墳時代になると、程近い中隈山丘陵に中隈山古墳群、その東方には横口式家形石棺をもつ石櫃山古墳、南方には家形石棺に直弧文を有する浦山古墳と古墳群、北東には打越古墳群、北西には古式の方墳とされる祇園山古墳及び鏡山・愛宕山の各古墳群が存在している。これら古墳の分布に示される文化的展開を基とし、歴史時代に入ると、高良山中の高良山神籠石をはじめ、合川町枝光に筑後国府、国分町に筑後国分僧寺、国分尼寺が相次いで営まれ、この一帯は筑後地方の政治・文化の中心となっていく。

要するに、正福寺遺跡とその周辺は、広大な平野と村落の成立に適した低台地を基に、すぐれた古代文化が育かれたのであって、久留米市内における埋蔵文化財の密集地域を形成している。

1. 市ノ上北屋敷遺跡 2. 市ノ上遺跡 3. 古宮遺跡 4. 御蔵園遺跡 5. 二本木遺跡
6. 船塚古墳 7. 打越古墳群 8. 祇園山古墳群 9. 狐塚古墳 10. 上村古墳 11. 中隈山古墳群 12. 石櫃山古墳 13. 浦山古墳群 14. 極楽寺古墳群 15. 福聚寺古墳群 16. 池田古窯跡 A. 筑後国府跡 B. 筑後国分尼寺跡 C. 筑後国分僧寺跡 D. 御井郡衙跡推定地横道遺跡 E. 上津土塁跡



第2図 正福寺遺跡周辺地形図 (1/2500)

III 遺構と遺物



第3図 遺跡全景

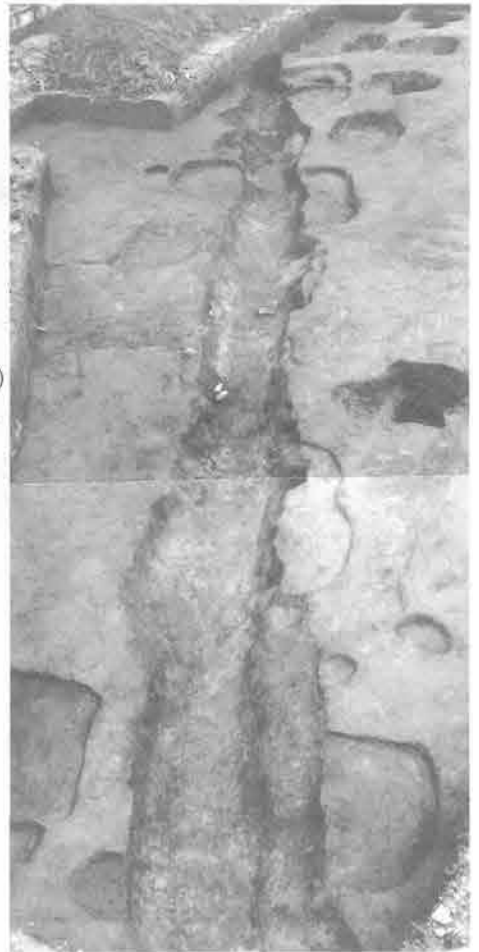
正福寺一帯は、縄文時代の遺物散布地として周知の遺跡でこれまで多数の縄文土器・石器等が採集されている。また、採集された遺物の中に、石刃技法によると考えられる大形の石刃が含まれており、付近に旧石器時代の遺跡の存在が予想される。分布調査の際、今回の調査地点においても石器等の散布が認められることから、当初縄文時代の遺構が存在するのではないかと考えられたが、発掘調査の結果、後世の削平・攪乱が著しく、層序も表土下はすぐ地山（黄褐色粘質土層）となり、かろうじて地山面上に残った溝・近世墓等の遺構が検出されたにすぎない。

溝から土師器類が出土したが、表土層・近世墓埋土中から二次的な状態で若干の縄文土器・石器、中・近世遺物が出土した。

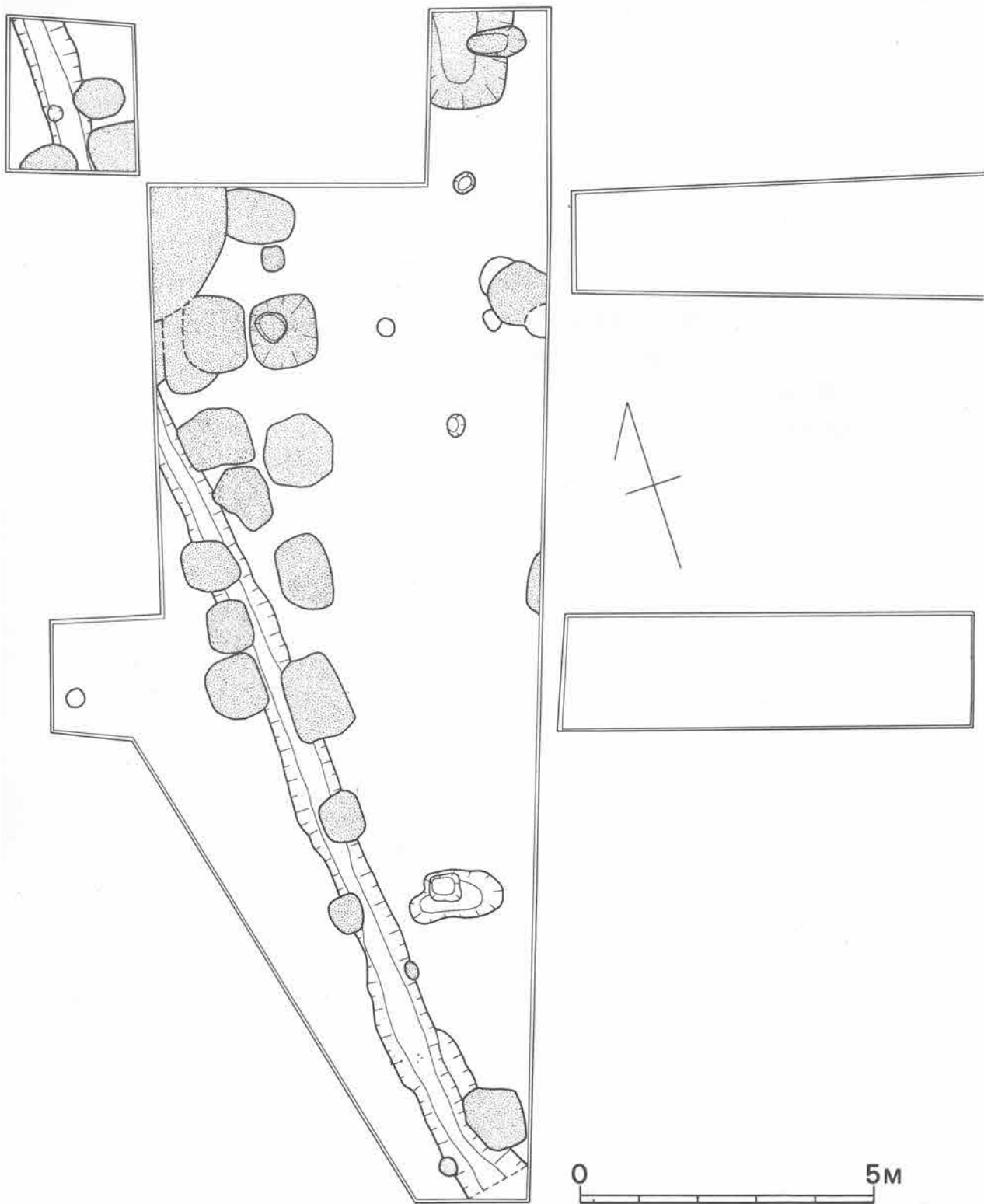
1 遺 構

溝 状 遺 構

調査区のやや西寄りを、ほぼ南北方向に延びるもので、調査区の南・北端ではやや東にカーブしながら調査区外に延びている。溝は遺構の一部を近世墓群によって切られ、さらに



第4図 溝状遺構



第5図 遺構配置図 (1/100)

上面は後世の削平により著しくカットされている。溝の長さは調査区内で約21mを測り、幅約65～120 cm、深さ約35cmで断面は浅いU字形を呈する。溝内には黄褐色土のブロックを含む黒褐色土層が堆積しており、その状況から意識的な埋土と考えられる。埋土中から9世紀後半に比定される土師器碗類が出土した。正福寺は9世紀前半の創建と伝えられるので、この溝が古代の寺域に関係する可能性も考えられるが、現時点ではその性格づけは困難である。

2 遺 物

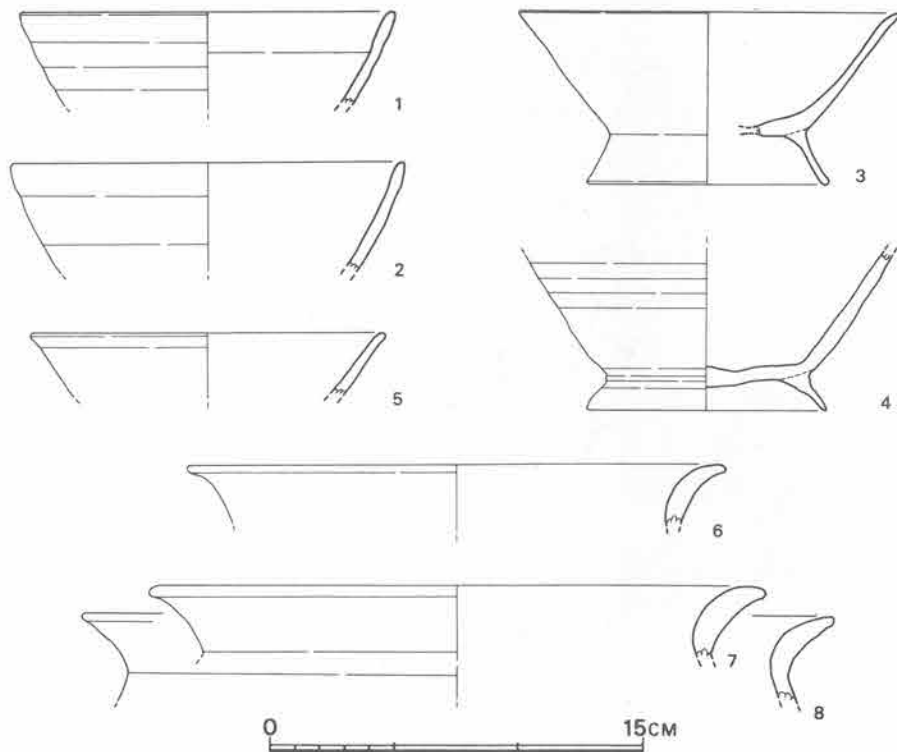
溝状遺構出土遺物

溝状遺構の出土遺物は、土師器のみであり、器形は、碗形土器・甕形土器の2種類である。いずれも小片にすぎず、図示できるのは数少なく、第6図に示すのみである。

土 師 器 (第6図)

碗形土器 (1～5)

1・2は、口径約15cmを測る。いずれも口縁部のみの破片であるが、底部に高台を有する碗と思われる。1は、巻きあげ法の痕跡が器壁に残っている。器壁は、横撫で調整され、焼成は良い。2は、器壁は丁寧に整形され、横撫で調整が施されている。焼成はひじょうに良く、器壁は堅固である。3は、口径約15cm、高さ約6.9cmを測る。口縁部は外反し、器肉は薄い。底



第6図 溝状遺構出土土師器実測図 (1/3)

部には器肉が薄く、器高が高い脚様の高台を付けている。4は口縁部を欠損しているが、口径は1～3とほぼ同様の大きさと思われる。高台は裾が広がり、先端が細くなっている。器壁は、焼成がよく堅固である。5は、口縁部のみで口径約14cmを測る。



第7図 溝状遺構出土土師器

口縁部は外反し、口縁端部は外側へつまみ出され丸く整えている。器壁は内外面とも研磨されており、色調は黒色を呈した黒色土器である。

壺形土器（6～8）

いずれも口縁部のみである。口径は約21～30cmを測る。器壁は横撫で調整が施されているが摩耗している。

以上が溝状遺構から出土した土師器である。これらの遺物の時期は、大宰府を中心とした編年試案によると、体部はほぼ直線的様相を呈し、高台には器肉の薄い脚様のものを貼付けていることから、9世紀後半に比定するのが妥当ではないかと思われる。

註 横田賢次郎他、「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集2』1976

その他の出土遺物

石 器（第8図）

1、3はいわゆる「つまみ形石器」と称されているもので、刃器状剥片を素材とし、打面から1～2cmの両側辺にノッチを加え、折断している。両側縁には部分的に微細な使用痕と目される刃こぼれが観察できる。Iはバルブカットされている。共に黒曜石製。

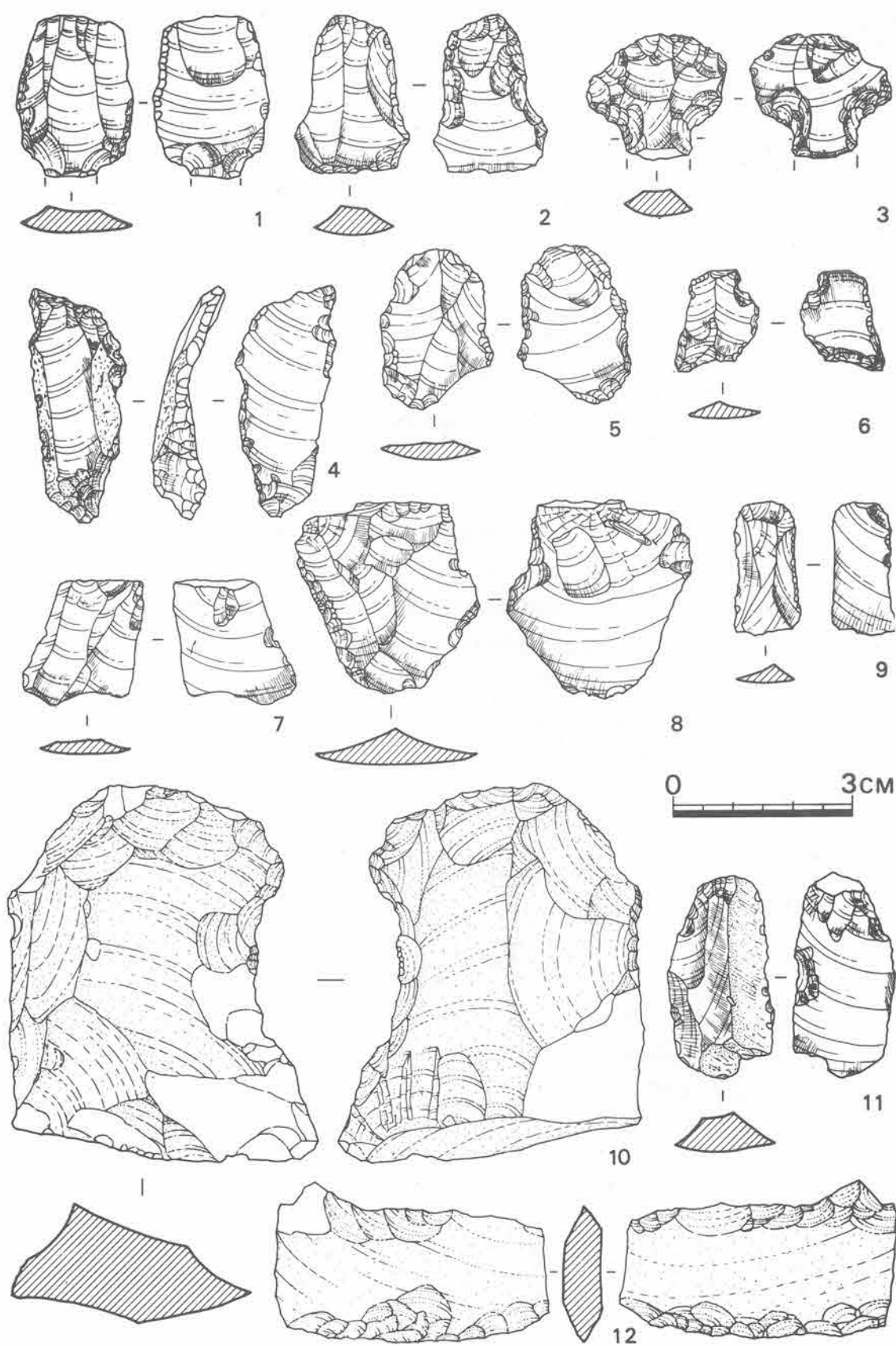
6は先端を破損した剥片鏃である。背面には主要剥離面と逆方向の剥離面が看取される。

8は黒曜石製のサイドスクレイパーで、刃部の角度は約45度と堅牢に作出されている。平坦な自然打面で部分的に調整され、バルブが顕著である。

11はサヌカイト製のスクレイパーで、打面を大きく残している。新しい剥離面がめだち詳細は不明であるが、右側辺に若干内彎する刃部を有したスクレイパーと考えられる。

12はいわゆる横形の石匙で、つまみ部と片側半分を欠失する。素材にサヌカイト製の横長剥片を用いている。刃部調整は精巧になされており、周辺の加工も丁寧である。

5・7・9・10は使用痕ある剥片で、いずれも黒曜石製。5の主要剥離面左側辺は特に刃こぼれが著しく、光沢を帯びている。10の背面右側辺には大きく自然面が残されており左側辺は左方向からの剥離面が観察される。このことから本剥片は90度打面転移された石核から剥取され

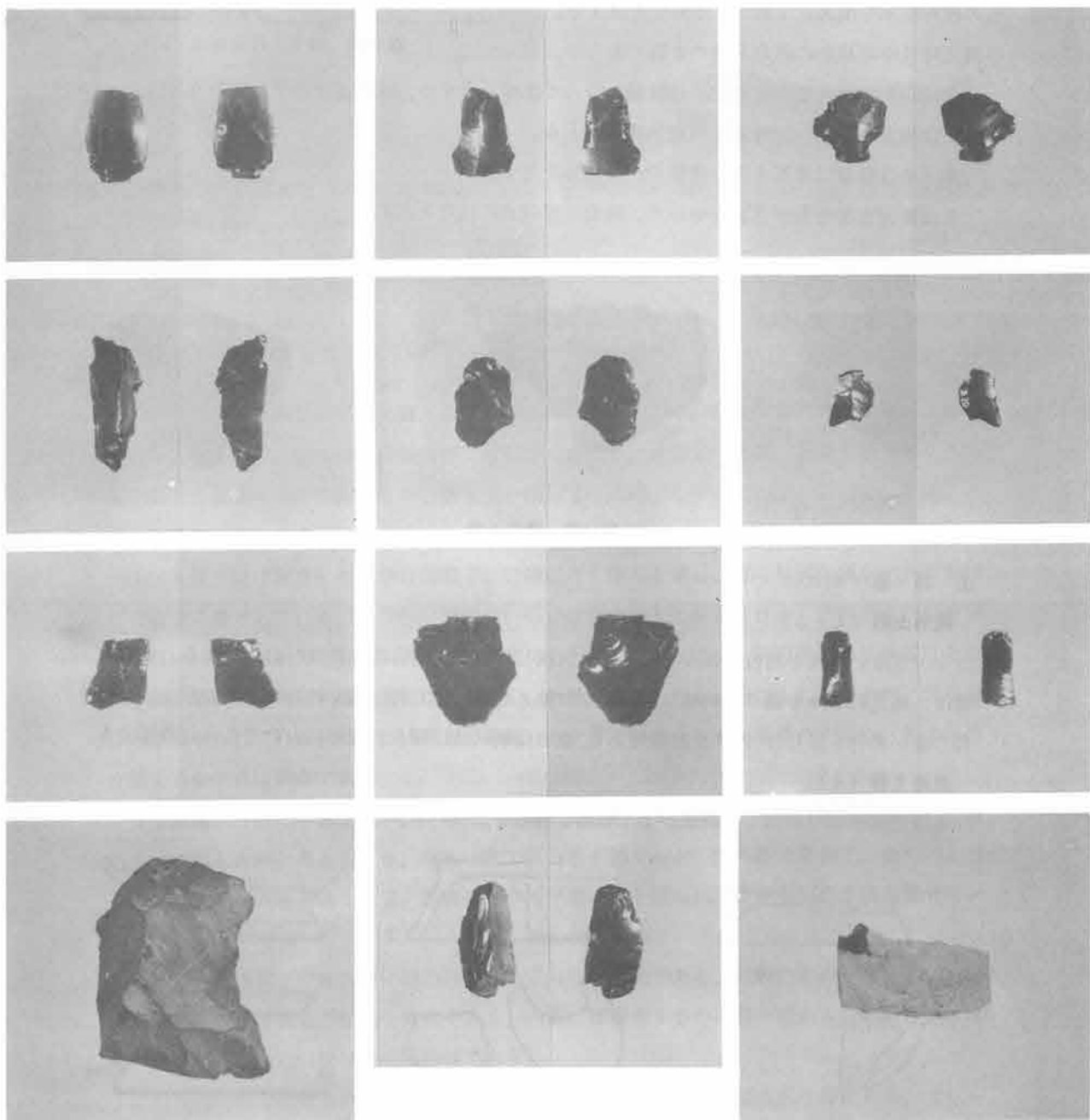


第 8 图 石器实测图 (1/4)

たものであろう。

4は彎曲する縦長剥片を素材とし、打面側をカットして嘴状に刃部を作出したドリルである。背面の剥離稜線が著しく磨滅しており、手ズレに因るものと考えられる。

13・14は砂岩製の砥石で、いずれも中砥である。

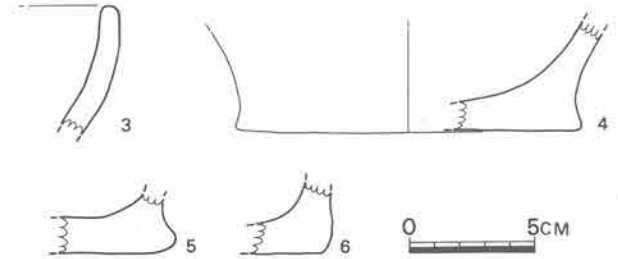


第9図 石 器



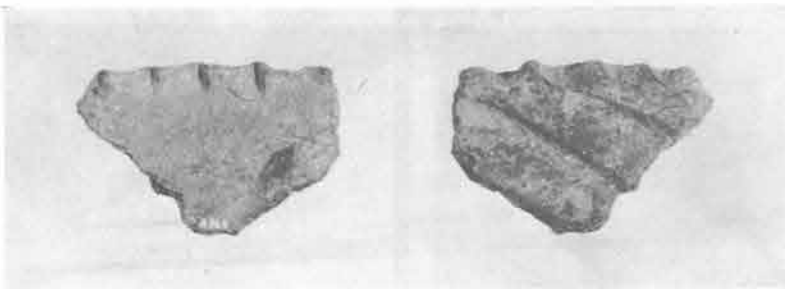
縄文土器 (第10図)

1は口縁部がわずかに外反し、口唇部は内外面からの指頭によって波状を呈する。口縁部には指頭による斜行沈線を施文する。胎土に多量の滑石粉末を混入しており、赤褐色を呈する。
縄文時代中期後半の阿高系統の土器であろう。



第10図 縄文土器実測図 (1/3)

- 2は山形口縁をなすもので、口縁部に沿って沈線を有する。後期前半の所産であろう。
- 3は無文土器で、口縁部は内彎気味に立上る。
- 4・6は器壁に滑石を含む底部で、茶褐色を呈する。
- 5は断面台形を呈する底部破片で、晩期の夜臼式に比定される。



第11図 縄文土器

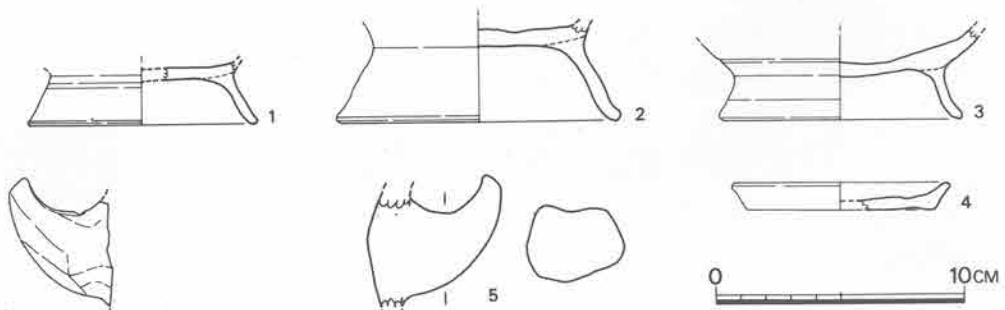
土師器 (第12図)

椀形土器 (1~3)

1~3はいずれも高台部のみで、椀部を欠損している。高台径は約9~11cmを測る。1の高台は、高さ約2cmを測り喇叭状に開く。2は他と比較しても特に高く約3cmを測る。3は、椀部の底が黒色を呈した、内黒土師器である。高台は喇叭状に開き、裾部においてさらに外反する。

皿形土器 (4)

4は底部糸切りの皿で、焼成がよく堅固な器壁をしている。



第12図 土師器実測図 (1/3)

把 手 (5)

把手の部分のみで甕の大きさなどは不明である。把手の器壁は篋削りによって整形されている。



第13図 土 師 器

瓦 器 (第14図)

中世に属する遺物として、瓦質・土師質の土器片若干がある。表土や溝内の攪乱部、また墓壇内等より出土しているが、直接遺構とは結びつかない。厳密に言えば「瓦質土器」と「土師質土器」に2分すべきであろうが、便宜上一括して「瓦器」と呼んでおく。器形として甕、火鉢、土鍋等が見られる。
(註)

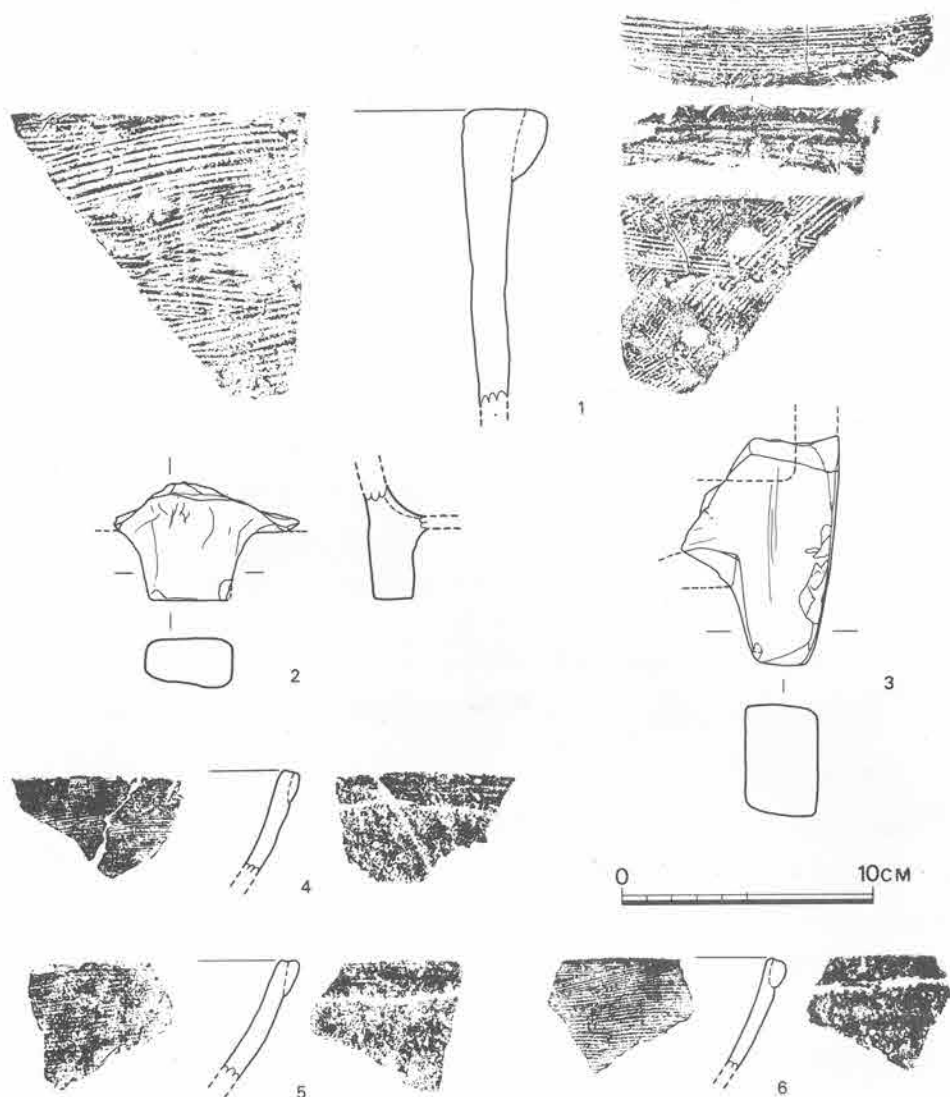
1は瓦質、ほぼ直立した大甕口辺部で、口縁に近く厚みを増し、更に外面に幅広い凸帯を付して複合口縁としている。口唇部は平坦で、口径は50cm以上と推定される。内外面及び口唇部は、粗いハケ目で調整されている。胎土は密であるが焼成火度低く、灰白色を呈し軟質である。

2は土師質、円筒形の本体に付された脚で、火鉢と考えられる。手づくねであるが、先端部は水平に切られている。内面には横走する粗いハケ目が認められる。茶褐色を呈し、胎土に砂を混えるが焼成は堅緻である。

3は瓦質、方形の本体に付された脚で、断面も方形をなす。底部の4隅に付されたものであろう。これも火鉢と考えられる。胎土は密で灰白色を呈するが、内外面は黒色で、全くの瓦質といえよう。焼成火度低く軟質、表面はへらで平滑に仕上げられ、丁寧な製作手法を見せている。

4～6は土師質、口縁外面に低い凸帯をめぐるした土鍋である。比較的器肉が薄く、胎土は砂を混えるが、茶褐色の堅緻な焼成である。内面には横走するハケ目が認められる。外面には煤の付着が著しい。口径は約40cm前後である。

この他円筒形で凸帯をめぐる瓦質の火鉢片、丸底に近い瓦質の甕底部片等がある。これらは、形式上室町時代に比定すべきものであるが、土鍋口縁の凸帯が退化していることから、そ



第14図 瓦器実測図 (1/3)

の後半期に位置するものかと考えられる。

註 萩原裕房、古賀壽『中世の遺物』『二子塚遺跡』久留米市開発公社 1976

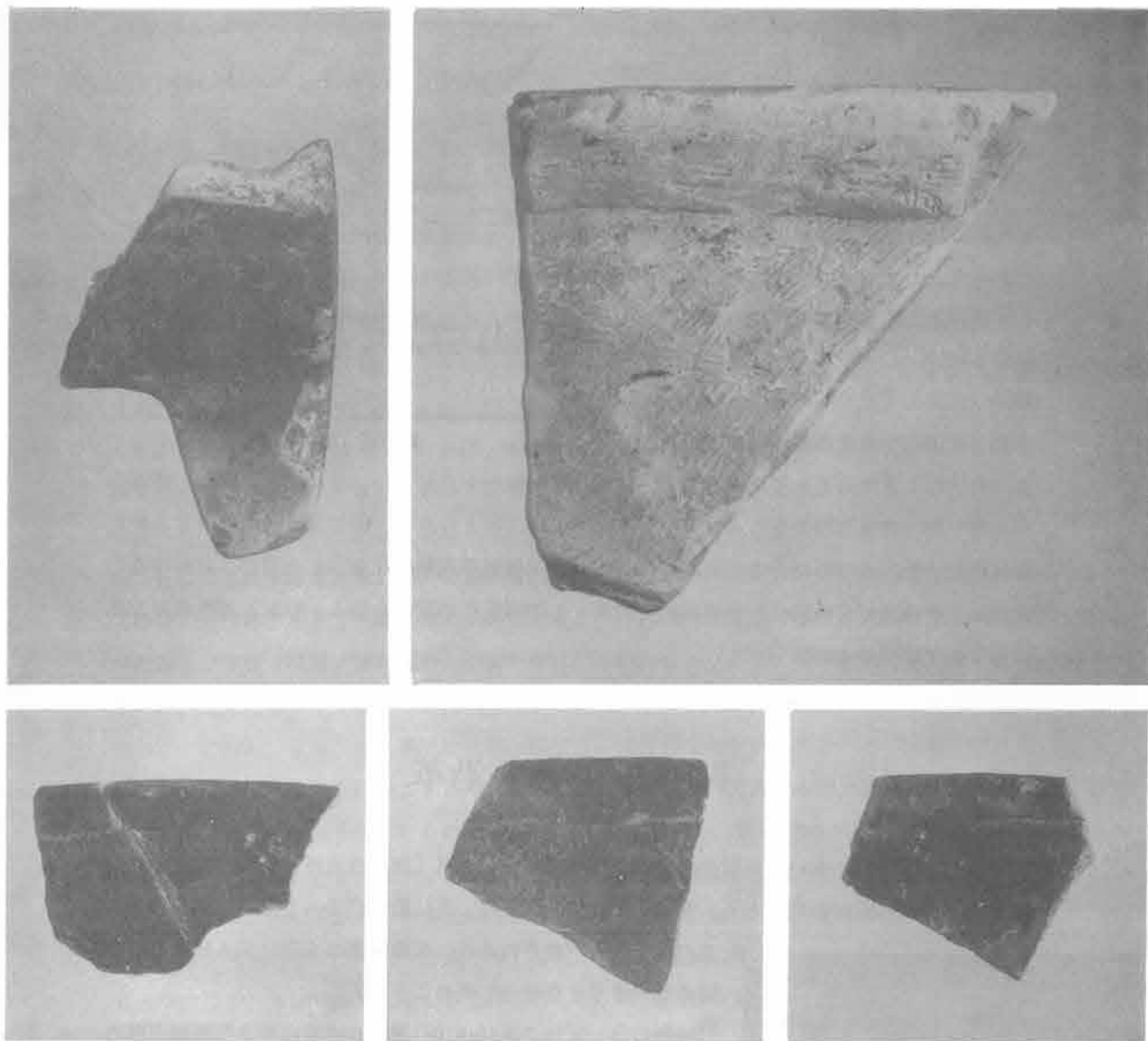
陶磁器 (第17図)

陶磁器類は、表土、溝内の攪乱部、墓壇内等より出土した。竜泉青磁碗の細片1点を除けば、すべて近世のものである。墓壇内出土のものも細片が多く、副葬されたとは考え難い。

大別すると伊万里系の磁器、肥前大外山（武雄周辺）諸窯の陶器に分けられるが、他に萩焼と思われるもの1点、窯不明の細片若干がある。



第15図 瓦器



第16図 瓦 器

伊万里系磁器 (2)

染付の碗や皿、型抜ききの白磁小皿、青磁の仏花器等があり、出土量は少ない。2の皿は、見込に蛇の目あとを残し、高台裏に「女」または「文」と読める墨書がある。17世紀代のものだろう。

大外山系陶器 (3～6)

緑釉の碗(4～6) 灰釉蛇の目の皿(3)、鉄釉のスリ鉢、甕、徳利、櫛描きまた刷毛目の捏鉢、緑釉櫛描きの壺、白釉の大鉢等がある。このうち緑釉の碗は17世紀代、鉄釉のスリ鉢や櫛描きの捏鉢等は19世紀代にそれぞれ比定される。量的には最も多い。

萩焼陶器 (1)

ただ1点であるが、白釉のかかった軟質の盃片がある。内面には茶色の細かい貫入が見られ、

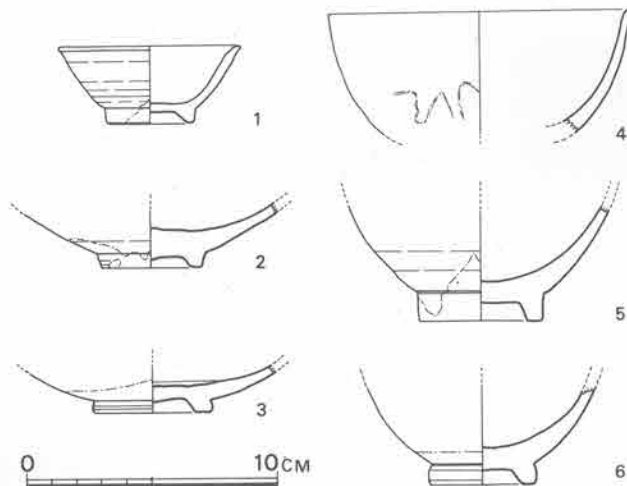
萩焼と思われる。

これらはいずれも日常の雑器であって、年代的には17世紀より19世紀に及ぶものであろう。ここでは伊万里系の磁器よりも大外山系の陶器が多く出土したことに注意したい。

瓦

瓦は表土中や、北西隅の塚中で出土し

ている。殆んどが丸瓦・平瓦の断片で、焼成良く堅緻なものが多い。平瓦は全く無文で時期を定め難いが、丸瓦の特徴からみてすべて近世のものと考えられる。軒先瓦は珠文を有する軒丸瓦（巴文？）1点のみである。日渡には近世久留米藩御用瓦師の江瀬家が土着し、いわゆる「日渡瓦」を焼造していた。正福寺の南方に多くこの種瓦片の散布を見る。なお、古代の布目瓦は全く出土していない。



第17図 陶磁器実測図（ $\frac{1}{3}$ ）

IV 正福寺の沿革

鎮護山正福寺は、永い神仏習合の歴史を持つ高良山玉垂宮（現高良大社、式内名神大社）にゆかり深い天台宗の古刹である。明治2年（1869）2月、排仏毀釈によって蓮台院御井寺（高良山座主院）が廃されると、久留米藩は当寺に10人扶持を給し、御井寺の寺号を存続せしめたことがある。⁽¹⁾

境内には、文化7年（1810）第55世高良山座主伝雄僧正題の一石一字書写妙経塔、明治3年（1870）第57世座主亮恩僧正建立の金剛般若経六万部供養塔などがあり、高良山との深い関わりを物語っている。

本尊は阿弥陀如来であるが、これは宝暦再興（後述）以降のことであろう。古くは毘沙門天と高良大菩薩（高良玉垂命）を祀る神仏習合の宮寺であったようである。すなわち、その草創について、『筑後国高良山寺院興起之記』は「国分毘沙門」として次の如き伝説を記している。⁽²⁾

天長年中、草部鶴見麻呂多領庄園、家僕繁多、一年蒙聖命、征蕃三韓、群船解纜、擲颯摧楫、逆浪為山、軍船数多或覆或沈、鶴見一心念高良大菩薩 闇夜不解



第18図 一石一字書写妙経塔

東西、卒然一火懸空、照於一舟、又多門⁽³⁾門現鱸先、誠護國神通之利益、豈不偉乎、風止波靜着岸、鶴見⁽³⁾埭里起塔、安多門⁽³⁾并大菩薩尊像、座主之門人有了信阿闍梨 顯密硯德、而亦委音樂、照鏡常愛為上足、則請為別當、又勸請山王、以為鎮守、寺境方六町、喜捨俸田數十町、僧舍十五區、号正福寺

第一、天長年中（824～834）に三韓を征するなどとは全くの時代錯誤であり、史上に類似の事件も見当たらない。強いて求むれば、承和3年（836）7月、遣唐使船4隻が遭難し、大使藤原常嗣等が肥前国に漂着した事件⁽⁶⁾と関係があるろうか。しかし、鶴見麻呂が果してこの時の遣唐使一行に随伴していたかどうかは、確かめようのないことである。次に正福寺の鎮守として建てられたという山王宮は、国分町谷鎮座の日吉神社と思われるが、同社の境内が筑後国分寺（僧寺）の遺跡であることは周知の事実である。『寺院興起之記』の著者は、国分寺を筑後川⁽⁷⁾の対岸国分寺村（現宮ノ陣町宮瀬）の国分寺としているようなので、その矛盾には気付いていないが、天長の頃早くも国分寺が廃滅しており、その跡地に山王宮が勧請されたなどとは信じ難いことである。なお、山王権現は比叡山延暦寺の鎮守神であるが、史料の上で高良山が天台宗に属したのは、中世以降のことと考えられる。恐らく、後代における山王宮と正福寺の関係⁽⁸⁾から、このような伝説を生じたものであろう。「寺境方六町」にしても、現実にはあり得ない誇大な表現である。とすれば、この草創伝説には一顧の価値もないようであるけれども、筆者はなおその中に古伝と認むべき要素が含まれていることを指摘したい。まず草創の年代であるが、高良山関係の寺社に多い「白鳳年中」などとせず、天長に置くことが注目される。草創年代を引き上げることは、寺社縁起の常套手段である。にもかかわらず天長の草創を説くのは、やはり古伝に拠ったものと考えたい。天長年中の高良山別当（未だこの頃「座主」の称はない）は、『高良山座主家系図』によれば第5世仁勢上人と、第6世照鏡上人である。⁽⁹⁾仁勢は天長5年（828）に没し、その弟照鏡が後を継いだことになっている。この伝説では、照鏡がその高足了信を正福寺の別当としたというので、正福寺の草創は一応天長5年以降、承和元年（834）に至る間と推定される。また、創建者を「草部」氏とすることも興味深い。『寺院明細帳』には「僧鶴見鷹」⁽¹⁰⁾とあり、正福寺では「鶴見摩大法師」と尊称しているが、「草部鶴見麻呂」というのが古伝であろう。

第19図 金剛般若經供養塔

る。すなわち御井郡弓削郷を本貫の地とする公姓の古代豪族であった。そして、高良山神宮寺高隆寺の創建にも深く関わり、⁽¹³⁾『高隆寺縁起』弘仁元年(810)3月講堂改造の件りに「大領草部公吉継、少領草部公名在」とあるによれば、御井郡司であったと考えられる。また同書は、「異本縁起之末載之」として五姓氏人をあげ、その一たる草部氏について、「御供所職、鯨贅人也、三池郡司」と説明している。この記載を信ずれば、三毛郡司にも任じていたことになる。その裔は代々高良山に奉仕し、「管長」を称した。⁽¹⁴⁾恐らく律令時代における筑後地方最大の勢力であったろう。この草部氏が弓削郷を本拠とすることからは、豊後日田郡司の日下部君、肥後葦北国造などと同じく、軍事的部民である鞆部⁽¹⁶⁾として編成され、かつて朝鮮出兵に動員されたことが推定される。筆者は『雄略紀』の記事等により、この草部氏こそ筑後の代表的古代豪族水沼君の末裔で、高良神の三韓征伐伝説もこの氏族の伝承をもとに成立したものであろうとひそかに考えているが、詳細については別稿に譲りたい。いずれにせよ、当寺の草創伝説に草部氏と三韓征伐を説くことは決して偶然ではない。従って、当寺の創建に草部氏が関与したことは事実であろう。

また、高良大菩薩(高良玉垂命)の本地は、勢至菩薩、或は十一面観世音とされるが、⁽¹⁹⁾『高良縁起』⁽²⁰⁾高良山隆慶上人伝⁽²¹⁾等によれば、古くは毘沙門天とされていたらしい。⁽²²⁾

『高良山寺院興起之記』に、当寺を「国分毘沙門」と記すことは既に述べたが、伝説の毘沙門天は、今境内の一角にコンクリート造りの小堂として遺っている。また、



第20図 高良大明神座像



第21図 境内の中世石造遺物群



第22図 本尊阿弥陀如来

本堂には束帯姿の高良神座像が祀られているが、これは「二十六例講」の本尊とされた御影²³⁾（室町時代）の写しで、江戸時代の作である。排仏の際当寺に遷されたことも考えられるが、高良神の彫像として珍しいものであろう。

要するに、草創伝説の骨子は、天長の頃御井郡司たる草部氏が、高良大菩薩とその本地毘沙門天を祀って当寺を創建したというにあるので、その点に関しては、ほぼ史実と認むべきではなかろうか。

中世の正福寺に関する史料は見当たらないが、境内には若干の中世石造遺物が集められている。『寺院明細帳』によれば、当寺は天正年中（1573～1592）に至って遂に廃滅し、宝暦年中（1751～1764）高良山極楽寺の僧即澄（即心の弟子）によって再興されたとある。現に「当山開山即澄上人位・明和三戌年十月廿五日」と記した位牌が祀られている。本尊が阿弥陀如来とされたのもこの時であろう。『太宰管内志』²⁴⁾によれば、極楽寺は「恵心僧都御作の弥陀」を本尊としているからである。

従って、現在の寺地が果して古代の正福寺の位置を踏襲しているかどうかは、慎重に検討されねばならない。伝えるとおり9世紀前半の創建であれば、当然古瓦の出土があつてよいはずである。今回の発掘調査では、平安時代に遡る古瓦は遂に1片も発見されなかった。しかし、溝や土師器など、伝えられる創建時に近い遺構、遺物が出土したことは大いに注目すべきである。将来の調査に期待したい。

註

- 1 伊東尾四郎「高良山神社の神仏分離」『明治維新神仏分離史料』第4巻（昭和45年復刻）
- 2 御井寺蔵、明治18年写本
- 3 高良山の神火とされる「一ツ火」を指す。
- 4 『高良山隆慶上人伝』に、白鳳7年2月28日の高良神託宣として、「歆哉、吾願既満足、從今日我名可称護国神通高良大菩薩」とみえる。
- 5 御井寺蔵
- 6 『続日本後記』巻5
- 7 福岡県教育委員会『筑後国分寺』福岡県文化財調査報告第44集（昭和45年）等
- 8 『宮寺縁事抄』に『高良縁起』を断片的に採録し、「別当延暦寺」と記すのが初見であろう。太田亮『高良山史』（昭和37年）参照
- 9 高良大社蔵（異本）
- 10 久留米市役所『久留米市誌』上編（昭和7年）所引
- 11 高良の神裔を称する5氏、すなわち、「丹波、物部、阿曇部、草部、百濟」または、「丹波、物部、安曇、前田、草部」の各氏（高良山高隆寺縁起）
- 12 高良大社蔵、享保3年（1718）写本
- 13 『高良縁起』に「同月（天武2年2月）十四日早朝、国宰依早部公夜夢之示現、合力林^{（草）}中弘荊棘、平石巖、草創仏殿」とあり、『高良山隆慶上人伝』に白鳳6年高隆寺創建に関わった人物として「草部真土」「弓削戸部波人」の名をあげている。
- 14 『大祭礼鎮在辻浮殿等之次第』に「管長草壁」とある。古賀壽、山中耕作他『高良玉宮神秘書・同紙背』（昭和47年）所収
- 15 『豊後国風土記』日田郡鞆編郷条
- 16 敏達天皇紀12年12月条に「火葦北国造刑部鞆部阿利斯等之子臣達率日羅」とある。
- 17 草部（日下部）は、雄略皇后の御名代部である。『日本書紀』巻14、雄略天皇10年条に見える水間君贖罪の説話は、水間（水沼）君と草部氏の関係を暗示するものと考えられる。
- 18 『高良玉垂宮縁起』にその完成した姿がみられる。古賀、山中『高良玉垂宮神秘書・同紙背』所収
- 19 太田亮『高良山史』
- 20 『石清山八幡宮記録三十八』建保7年（1219）写本
- 21 御井寺蔵、奥書延長2年（924）、明治18年写本
- 22 『高良山寺院興起之記』毘沙門堂の項に、「当知、三韓退治当社之昔願、異類降伏此山之古法、故以毘沙門為当社本地」とある。

23 高良大杜藏

24 伊藤常足『太宰管内志』中卷（昭和44年復刻）

〔参考〕 一石一字書写妙經塔銘文

夫宝篋印塔者、大日覺王三摩耶形、即全身舍利積聚如来宝塔也、一切法要密印皆在其中、故是塔所在之处、有大神驗、殊勝威德、能滿一切世間吉慶、沉聞深理、至心起信功德不可限量、經曰、若人以土石作塔、書此神咒、安置其中、礼拝供養、靈驗応心、無願不滿、乃至百病万惱一時消滅、寿命延長、福德無尽、爰信心法師、陀羅尼百部写於一石一字、又当邑某等、每一石写妙經一字、写已建宝篋印塔于正福寺境内 而納於塔下焉、蓋妙法華經者、東流一代經之父、而派為一代諸經、故一代諸經皆歸此妙經、譬如百川流歸於大海、無二無別、然書写此經者、即是書写一代諸經也、宜其功德廣大無辺、不可称量也、其所志者、近為現世安穩、遠期後生極樂、尽未来際、福法界群生、意趣殊大、以堪可随喜矣、誠逢于難逢妙經、結縁当慶宿因有、在亦作於難作密塔、功德須喜、來果可期矣、春來具說写經之顛末、徵余題片言於其塔、遂書此附焉

于時文化七歲庚午卯月八日

良山座主 僧正伝雄

久留米市文化財調査報告書第16集

昭和52年 8 月15日

発行 久留米市教育委員会
久留米市城南町15-3

印刷 (有) 猪飼プリント
久留米市東和町6-18

